

鍋田川遺跡から出土した卜骨と刻骨

大東市東部の寺川 5 丁目から中垣内 3 丁目に所在し、生駒山地西麓の標高 15 ～ 35m の段丘や扇状地に立地する遺跡です。昭和 33 年に行われた砂防ダム工事の事前発掘調査で、土器などと一緒にト骨や刻骨が出土しました。また、これまでに行われた 5 次にわたる発掘調査によって弥生時代から古墳時代の土器が多く出土しました。

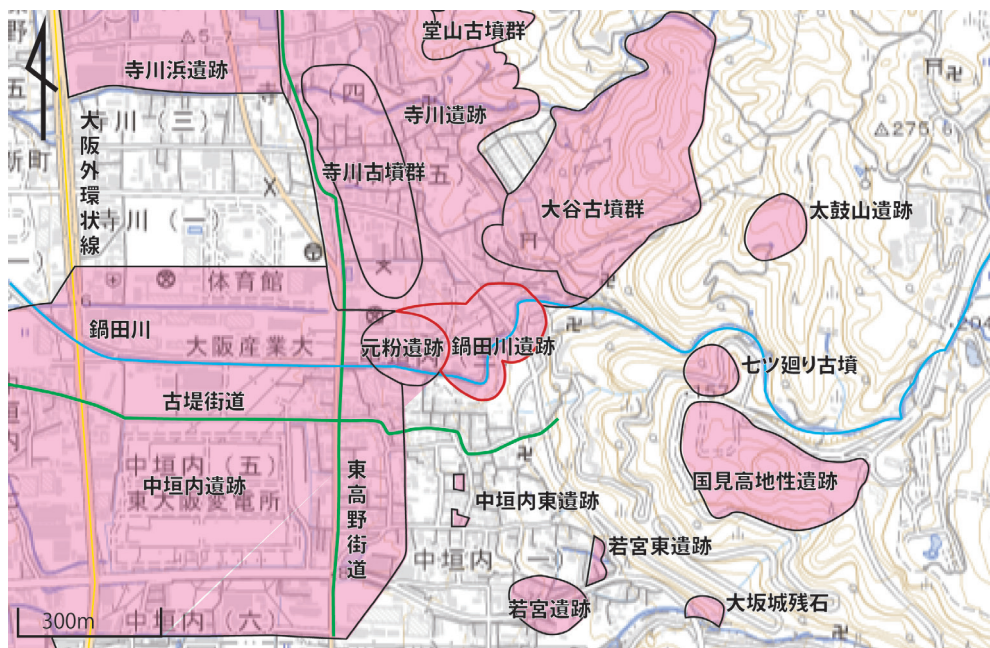


図1 鍋田川遺跡位置図

地理院地図

ト骨は動物の骨を用いた占いである骨トこつぽくに使用された骨のことです。骨に円形の穴をあけ、その穴に先端を焼いた棒状のものを押し当て反対側に生じたヒビの入り方を見て吉凶を占っていました。ト骨は、弥生時代から奈良時代にかけて東北から九州の遺跡で出土しています。

刻骨は、シカの角やウマの長管骨(※)などに数本から三十本ほどの刻み目を
いれたもので、祭りなどに使用されたと考えられています。

※長管骨…手足を構成する骨のうち、大きく細長い骨全般をさします。

ト骨

鍋田川遺跡で出土したト骨（写真1）は、イノシシの^{けんこうこつ}肩甲骨を使用しています。残っている長さは 7.8 cmで、刃物で削り薄く整えられた骨の表面には浅く円形に彫り込まれた窪み（^{さん}鑽）が幾つか観察できます。鑽の中央には、先端を焼いた棒を押し当てた際の小さな焦げ跡（^{しょうしゃくこん}焼灼痕）が見られます。

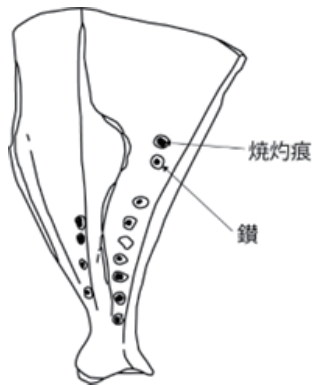


図2 ト骨の模式図

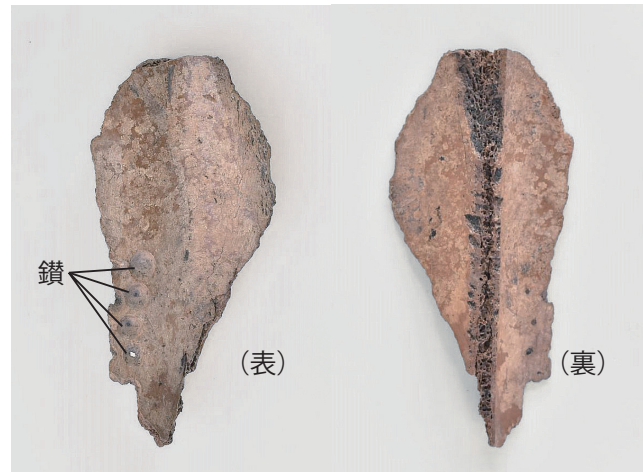


写真1 鍋田川遺跡出土のト骨

刻骨

鍋田川遺跡で出土した刻骨は、シカの角を用いています。長さは 19.8cm で、表面には 24 本の線が刻まれています。また、線の上には^{こす}擦ったようなあとが見られることから、擦って音を鳴らす^す擦り^{さざら}彫のササラゴと呼ばれるものとして使われていた可能性があります。



写真2 鍋田川遺跡出土の刻骨



写真3 ササラゴ状木製品（四條畷市鎌田遺跡出土）長さ 28 cm

（四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館提供）

—参考文献—

金関恕，佐原真（編）1996『弥生文化の研究』8 雄山閣

斎藤忠（編）1986『日本考古学論集』3 吉川弘文館

浄謙俊文他 1973『大東市史』大東市教育委員会

田中椋，佐原真 2011『日本考古学事典』三省堂

四條畷市史編さん委員会（編）2016『四條畷市史』第五巻（考古編）四條畷市